

第43回全国中学生人権作文コンテスト
沖縄県大会

那覇人権擁護委員協議会長 賞

互いに尊重しあえる世の中へ

与那原中学校 3年

米満 穂乃夏（よねみつ ほのか）

私の祖母は認知症でした。日本では、高齢化が進んでおり、それに比例するように認知症や介護が増えているのが実態です。祖母が認知症だと診断された当時、私はまだ小学校4年生の頃で、認知症のことについて母に説明されても、あまりピンと来ませんでした。

でもやはり、認知症と診断されてからの祖母は、当時の私からしても今までの知っていた祖母ではない、と薄々気が付いてきました。当時、コロナが流行っており、自粛生活を強制的にされていた時期なので中々、祖父母の家に訪ねることができず、1ヶ月に1回、行けるか行けないかの頻度でした。久しぶりに会う祖母は、だんだんと弱々しくなっているように見えました。次に祖母と会うときには、もう自分が知っている祖母の姿ではなくなるのではないかと、思うと怖くなり、もう次は会いたくないなと思ってしまうような時期もありました。私はそんな感情が、芽生えてしまったことに、今でも悔やんでいます。私の知っている祖母は、知的で頼もしく親戚にもよく頼られていた存在。料理が好きで、よく私に作ってくれていました。もうあの頃の祖母はいない、その事実を受け止めないといけない、と次第に思っていくようになりました。

これから私の祖母はどうなっていくのだろうかと思い、インターネットを用いて調べてみたとき、「物忘れがひどくなり、家族・自分の家・季節が分からなくなる」と出てきました。私はとてもショックを受けました。「家族のことを忘れてしまうってことは、私のこともいつか分からなくなるの。」私は頭の中が真っ白になり、次に会うときには、私のことなんてもう覚えていないのではないのか、と深く悩み、悲しく苦しい気持ちになりました。そこでもまた、もう次は祖母に会いたくないという気持ちが芽生えてしまいました。

それから、毎月、1、2回程度、祖母の家には訪れますが、その度に私の心の中では、「私のこと忘れてないかな」「私の名前ちゃんと覚えているかな」という気持ちでいっぱい

いっぱいでした。もちろん大好きな祖母に会いたい、だけれども、やっぱり自分が忘れられているのではないのか、祖母の記憶の中には、私と一緒にご飯を食べたり、笑って一緒に楽しくお話をしていた頃の思い出はもう、祖母の頭の中には、残っていないのではと思うと、物凄く悲しくなります。

そこから私は、インターネットを活用して祖母の診断された病気について、沢山調べてみました。私が一番印象に残ったものが、「認知症は進めば進むほど出来ることが少なくなる。でも認知症の方々では何ができていないのかが分からず、できない悲しさ悔しさを上手く表せないのです。こういったことが高齢者への虐待の行動が起きてしまう一つの要因となります。」

その記事に関連したニュースで、高齢者への虐待で、亡くなったという事態が日本で起っている現状に驚愕しました。しかし私自身も、私が数分前に同じ内容の話や質問を何度も繰り返してくる祖母に、腹が立ち、話を無視したり、反抗的な態度をとってしまったことを思い出しました。認知症と理解した上で接していても、少々いら立ってしまうことがあります、この小さいいら立ちの積み重ねが予期せぬ事態につながってしまうのかと考えました。

でも、やはり自分の感情だけに身を任せ、「虐待」という行動に出るのは、決してしてはいけないことです。認知症患者、一人ひとりも「苦痛」という感情が誰にだってあるでしょう、なによりも、自分の感情だけを相手に押しつけても何も解決などしません。一度、気持ちを落ち着かせ、冷静になり、相手、そして自分の気持ちを整理していくことが、何よりも一番大事だと思いました。

日本の医学は年々、進歩しています。そのおかげで、日本人の平均寿命も男女ともに伸びています。良い面も沢山ありますが、一方で、認知症の増加、高齢者の虐待などが起こっています。私自身、認知症に対する世間の関心度、そして理解度の幅がもっと広がってほしいです。数十年後、これからの日本はどうなっていくのでしょうか。私にもこの先の未来のことについてなど、一つも分かることはないけれども、「高齢者虐待」という言葉が、世間やマスコミから全く耳にしなくなるような未来であってほしいと、私は考えています。私はそんな社会を目指すためにも、これから、「自分だけの感情に任せた行動でなく、相手の気持ちを考えて、お互いに尊重し合えるような人々であってほしい。相手の気持ちを理解して接していきたい。」と日々、心がけていきたいと思います。

私の考え、私の一歩が、誰かを救う一歩だと信じて、踏み出していきたいです。